

令和2年度大学ポートレートステークホルダー・ボード 主な意見

(令和2年9月25日開催)

1. 情報活用のためのデータについて（収集・提供範囲、提供方法、種類）

- 国公立大学の情報活用について、私立大学関係者が使えていないので私立大学でも使えるようにしてほしいという意見が前回あったと思うが、状況はどのようになっているか。
- 学校基本調査は全国公私立大学が含まれるのでそれを使った分析はできるが、私立大学データは大学基本情報ほど細かくなっていないので大学全体の動向を知る程度にしか活用できない。国公立大学と同じ条件で私立大学を分析しようとする場合、国公立大学が提供している学校基本調査のもととなるような私立大学の個票レベルのデータを共有できるのかというのが議論のポイントになるかと思う。
- 大学のIR担当者等が分析を行うに当たっては大学基本情報の公開データをBIツールが使える形式に変換しなければならないが、その作業については大学ポートレートセンターで検討していると理解している。同じようなデータを収集して各大学が同じような作業をするより、どこかが一括して作業をしてくれるほうが大学の負担も軽くなる。
- デザインは凝らなくてもよいので、政策関係者・研究者が使いやすいような形で、CSV形式でローデータが簡単に集まるようになるとよい。IPEDSでは機関レベルのローデータをCSV形式でダウンロードでき加工も容易である。
- データ分析については財務に関する情報も活用できるのではないかと思う。学校基本調査の活用が難しければ各大学の財務諸表を使うことになるが、PDF形式で公表されておりデータ加工が煩雑なため、元データを入手できれば様々な分析ができる。
- アメリカでは財務データが一般公開されているが、財務諸表の各項目の定義が各大学でばらつきがあるため分析が進んでいないのが現状である。そのため日本で財務諸表を公表するなら各項目の定義をしっかりと整備する必要があると思う。その意味で、公開データの定義にばらつきがあるのを解決しようという民間レベルのコモンデータの動きは一つのイニシアティブであり、日本でもそういうことを今後想定したほうがよい。

2. 情報活用の支援とユーザコミュニティについて

- 情報活用を促進するためにはユーザコミュニティを作っていく必要もあると思う。データ変形の

特殊技術は学ぶ機会が少ないので、コミュニティを作りトレーニングしていくということも一つ重要なことだ。担当者が一堂に会して学ぶのは有益であり、どのように可視化できるのか、どのような図を作るのがよいのか意見交換ができるコミュニティができるとよいと思う。アメリカにおいても勉強会等が盛んに行われている。大学に情報活用を浸透させていくことで、情報が大学ポートレートを通じていろいろな意味を付加して社会に出ていくことにもつながっていく。

- IPEDS にはヘビーユーザーが存在し、ヘビーユーザーを作るためにはどうしたらよいかというところに関して、IPEDS のデータの公開の仕方は参考になるのではないか。
- 大学ポートレートはもともと受験生や保護者、高校の先生方が活用できるような進路先選びに主たるターゲットを置いていたが、本日の有識者の話を聞くと、まずデータを整備する環境を整えた上でヘビーユーザーを育成してコミュニティを作っていくことで、システム自体を発展・育成させていくことが重要なのではないかと感じた。現状では、一般ユーザーにとっては民間サービスの加工されたデータのほうが分かりやすく、大学ポートレートのように比較ができないものは使いづらい。そうになると、大学の IR 担当者や研究者が比較して分析できるようなデータを整備し、ヘビーユーザーができると欠点が見つかるのでコミュニティで議論し、使えるように加工されたものを高校生や保護者に提供していくほうが使い勝手がよいのではないかという印象を受けた。
- IR に活用できるようにしてヘビーユーザーを作るというのは重要な視点だが、ドラスティックな転換になると思う。
- 大学ポートレートの見せ方についてはヘビーユーザーがデータを熟知した上で考えていかなければならない。活用のほうが本来の目的に返っていくことが確認できたのではないかと思う。

3. 情報公表について

- IPEDS のようにローデータを一般公開することは大事だと思う。ランキング等に使われてしまう懸念はあるが、情報の非対称性の解消という点でアメリカでは必要悪として、学生を守ることによる利益のほうが上回るということで舵を切っているような気がする。データに基づいた知見の集積ができないと今後実証研究が進んでいかないのではないかと思う。アメリカでは今は個人レベルのデータも研究者に対して公開するということは一般的に行われている。
- 現在、一般ユーザーは過去2～3年までのデータぐらいしか得られないと思うので、過去に遡って全てのデータを一般公開できるようになればよい。さらに、学生目線に立ったデータ公開についての議論が行われればと思う。大学間比較が困難という問題もある。
- アメリカのカレッジナビゲーターは政策関係者・大学関係者目線のデータになっており、学生にとって必要なデータが少なく使い勝手がよくない。その反省を生かして、学生視点に立ったカレッジスコアカードが作られた。カレッジナビゲーターがなぜそこまで浸透しなかったかというのは日本にと

って参考になると思う。

- 大学に関することはこのウェブサイトを読めば全部手に入るようになればありがたい。新型コロナウイルス感染拡大に伴う各大学の学費面での配慮や対面授業の状況など、もっと柔軟かつタイムリーに情報発信ができるような仕組みがあるとよいと思う。また、アメリカが卒業後の収入の情報を提供しているように、日本でも家計に関わる情報が必要になってくると思う。

4. 大学ポートレートの置くべき主眼について

- 大学ポートレートには様々な目的があり、それらを全て満たそうとしてかえって混乱が生じている気がする。高校生や保護者に向けてであれば、出ている情報を見ると各大学のウェブサイトを見ても中途半端に載せているような感じで、逆に分かりづらく比較もしづらくなっている。認証評価や IR に使えるようにするとなると揃えるデータも異なり、文章の説明より数値データが中心に扱われるので、対象によって扱うデータ項目やデータの見せ方も変わってくる。日本でアメリカのように卒業後の収入データを集めるのは個人情報扱うことにもなり難しいので日本の状況に合わせた形になるが、誰がどのような情報をほしいのか、大学ポートレートが特にどこに主眼を置くのかある程度焦点を定めること、目的と対象とするステークホルダーにも関わってくる部分を改めて考えることが必要だと思った。

以上